日本医史学雑誌第三十三巻二号
昭和六十二年四月三十日発行

昭和六十一年八月九日受付

『五十二病方』中の「隋」の字に関する考察と解明

趙　有臣

馬王堆医帛『五十二病方』中には、「隋」の字が人体の特定の部位の名称として用いられている。それは

(一)　一五一行の「塩隋炙尻」

(二)　一五二行の「逸華以封隋及少腹〼」

(三)　一六九行の「贛（癰）戎塩若美塩、盈隋、有（又）以涂（塗）隋囟下及其上。」

(四)　二二一行の「穨（癩）、先上卵、引下其皮、以砒（砒）穿其隋旁。」

(五)　二二八行の「冶困桂尺、独□一升、并冶、而盛竹甬中……而傅（敷）之隋下二処……。」

の五個条で、この合計六個の「隋」の字に対して、文物出版社印刷版では、みな「脽」と解釈している。これは恐らく脽と隋二字の発音が近い為であろう。しかし、脽は即ち尻で、帛書の文面から見れば、隋を尻と解するは妥当ではない。例えば一五二行の「逸華以封隋及少腹」から見れば、隋という所は少腹と隣り合っている。これに反して、尻は少腹の後の下側にあり、少腹と甚だ離れている。また一六九行の「贛（癰）、戎塩若美塩、盈隋……」中の盈隋を一五二行の封隋と合せて考えると、隋という所は、凹んでいて物を入れることのできる所でなければならない。少腹あたりでこれに該当するところは、ただ臍だけである。故に「隋」は臍と考えるのが妥当である。「逸華以封隋及少腹……。」とは即ち逸華という

薬を臍窩につけ、そして下へ少腹までつけることである。「贛（癃）、戎塩若美塩、盈隋。又以塗隋囟下及其上。」とは、食塩を臍窩の中に一ぱい入れて、そして臍の上側と下側までつけることである。若し隋を尻と解するなら、塩のような薬を用いて、尻の凹みに一ぱい入れて、肛門を封鎖し、そして上へ前へ少腹まで薬をつけることになり、不合理である。その上、現存する古代医方の中には、塩を臍につけて癃病を治療する処方が少なからず見られる。例えば『外台秘要』巻二十七に引く所の『備急方』葛氏の「療卒関格、大小便不通、支満欲死、二三日則殺人方。塩、以苦酒和、塗臍中、干又易之。」及び『医心方』巻十二に『葛氏方』から引用した「治小便不通方、以塩満臍中、灸上三壮。」及び『外台秘要』巻二十七に『古今録験』から引用した「療熱結小便不通利方、取塩塡満臍中、大作艾炷、灸令熱為度、良。」などで、これから類推して、隋は臍であって尻ではないことが首肯されるであろう。また一五一行の「塩隋灸尻」の四字からも、隋と尻は同じ所でないことがわかる。もし隋が尻であるなら、この短い四字の中で、人体中の同じ部位に対して二つの違う名称を用いないであろう。「塩隋灸尻」四字は、その前の一五〇行の結尾句である。いま帛書一五〇行と一五一行について考えてみると

「□□□□□□干葱……塩隋灸尻。」

に示したように、一五〇行には「干葱」の二字しか残存していず、その前の六字は判読不能である。干葱二字の後は脱落しているが、帛書が毎行二六―二八字であることから推論すると、二〇字ぐらいあったと考えられる。そこで一五〇と一五一行では、干葱などを用いて癃病を治療する一つの処方を紹介し、最後に、この病気に対しては、また「塩隋と灸尻」の二種の治療法を用いてもよいとしていると考えられる。塩隋とは、前出の「贛（癃）、戎塩若美塩、盈隋……」のような治療法で、灸尻とは、一八〇行の「癃、燔陳芻若陳薪、令病者北（背）火灸之、両人為靡（摩）其尻。」のような治療法である。これも隋と尻が人体上の別の部位であることを示すもので、「隋は即ち尻である」とすることはできない。

癲病治療の二二一行の「以砒（砒）穿其隋旁。」と二二八行の「傅（敷）之隋下為二処。」の二条に至っては、どちらも

臍旁と臍下を刺激して、ヘルニアの縮まるのを促すのである。『甲乙経』巻九によると、臍旁の天枢二穴は陰疝と気疝を主治し、臍下の大巨二穴は癩疝を主治するとしている。これも「隋」が臍であることを示している。したがって、この戦国末期或は西漢初期に属する古代医学文献『五十二病方』中の「隋」という字が臍を指していることについては、議論の余地はないであろう。

しかし、隋を臍と解する例は、現存の医学古典中に見当らないばかりではなく、各種儒学経典、小学訓詁、乃至すべての諸子百家の中にも、その記載が見つからない。ただ許叔重が『説文解字』で「隋」の定義として下した「裂肉也」の三字は、臍であると明言してはいないが、筆者は「裂肉」の二字がすなわち臍を指していると確信する。厳密に言えば、それは新生児の臍帯を意味している。「裂肉」とはよけいな肉のことである。

つまり新生児が母体を離れて誕生したのちは、親から授けられた百体が、何一つ後日の発育成長の資にならないものはなく、臍帯という肉だけが無用の肉（裂肉）になって、だんだん乾燥して落ちてしまう。故に「隋」には、『玉篇』に「隋、落也」というように落ちるという義がある。臍帯が落ちたあとには臍の穴が残っている。この臍の穴は曽てよけいな肉を落としたあとであるから、人たちもこれを「隋」と呼んだ。この臍の穴は円く長い形をしているから、「隋」にはまた『正韻』の「隋、円而長」のように円く長くの義が生じた。「隋落」の隋も、「隋円」の隋も、初めの時はみな「隋」と書いたが、あとで区別する為に、別に「堕」という字を作って落ちるの義に当て、「橢」という字を作って、円く長くの義に当てた。こうして堕落や橢円と書くようになり、隋落や隋円とは書かなくなった。堕と橢は皆「隋」の衍化字である。

このように見ると、新生児の臍帯というよけいな肉が『説文解字』の「隋、裂肉（余肉）也」の義と正にぴったり合っている。これまでの『説文解字』の注解者は文献が足らない為、ただ『周礼』、『儀礼』などに依って、尸祭の残余無用のものを「隋」と称して、それで『説文解字』の「裂肉」を解釈した。これは『説文解字』の本義には合わない。

例えば段玉裁の注には「裂、訓繒余、引伸之、凡余皆曰裂。裂肉、謂尸所祭之余也。」段氏がここで「裂」を「繒余」

の称と解するのは是であるが、「裂肉」を「尸所祭之余」と解するのは非である。元来尸祭の残余物を「隋」と呼ぶのは、隋の引申義であって、隋の本義ではない。即ち『周礼・春官・守祧』の「既祭則蔵其隋」に対して、鄭玄は「隋、尸所祭肺、黍、稷之属。」と注している。鄭注の尸祭の隋には、肺のような肉類もあれば、黍と稷という肉類でないものもある。このように全部が肉類ではない以上、『説文解字』の「隋、裂肉也」の義とは合わない。

これまで『説文解字』を注解した人たちは、鄭玄が『周礼』の注の中で言った「隋」の義が『説文解字』の「隋、裂肉也」の義と合わないことを知りながら、別に徴すべき文献がないため、鄭玄の注を引用して『説文解字』を解釈するほかに仕方がなかった。また鄭注の隋がもともと全部肉類ではないことから、かれらは敢えて「裂肉」を「尸祭残余之肉」と解釈することができず、ただどっちつかずの「尸祭残余之物」と解釈している。しかしそうすると、ただ「裂」の字だけは解釈できるが、「肉」の字の説明がつかない。すなわち全部肉でない以上、裂肉と呼ぶべきではない。段氏はこのてぬかりをうずめようと思って「尸祭刌肺、黍、稷之属、已祭則為残余無用之物、故云裂肉、単言肉者、以其字従肉也。」とした。段氏は尸祭の切肺、黍、稷などを単に裂肉と呼び、裂黍、裂稷と呼ばないわけは、隋の字が肉に従う為であるというのである。この解釈は明らかに牽強附会である。問題の要点は許叔重が何の為に「隋」を裂肉と解釈したのか、そして隋の字形がどうして肉に従うとしたのかということである。段氏はこれらを解釈しないで、反って尸祭の残余という全部が肉でないものを「隋」つまり、裂肉と呼べる原因を肉に従うという「隋」の字形に転稼している。これから見ると、隋を尸祭の余り物と解釈するのは、隋の引申義であって、強いてそれを本義とするのは無理である。『説文解字』の「隋、裂肉也」は、ただ新生児の臍帯、つまり必ず脱落するよけいな肉と解釈するだけが本義であり、かつ毫も牽強附会の所がない。これは全く出土した医帛によってもたらされた新しい啓発である。

この文を書き終った後、もう一つの旁証を得た。『広雅・釈草』の「蔕、帯也」と、『説文解字』の「蔕、瓜当也」である。瓜当とは瓜蔕のことである。瓜には蔕があり、それでその蔓と根と相通じていて、胎児が臍帯で母体と相通ずるのと

同じである。故に新生児の臍帯が隋と称し、瓜の蔕も蓨と称する。瓜の蔕を蓨と呼ぶのは隋の引申義で、且つ瓜が草木類であるから、「隋」の上に草かんむりを加えて、区別するのである。